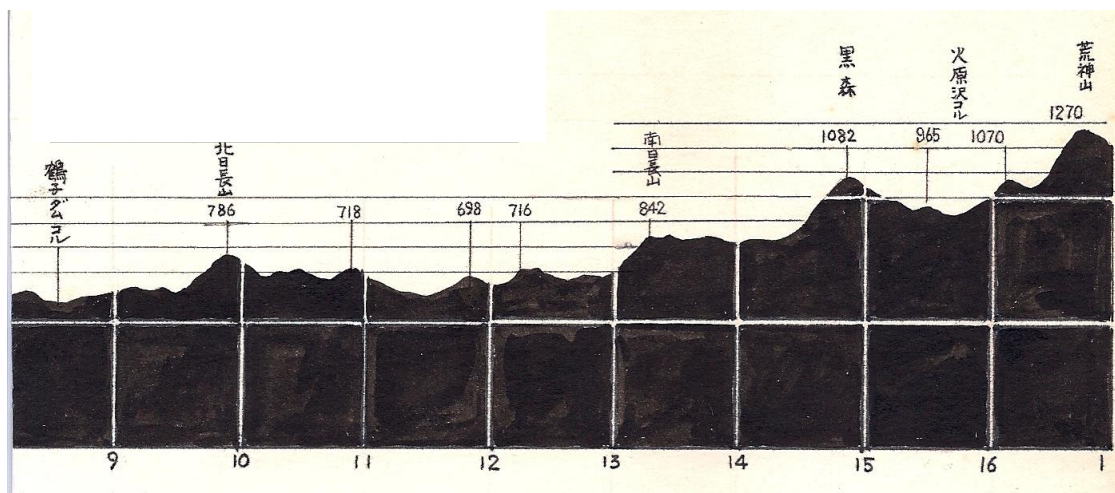




銀山温泉から荒神山・船形山縦走

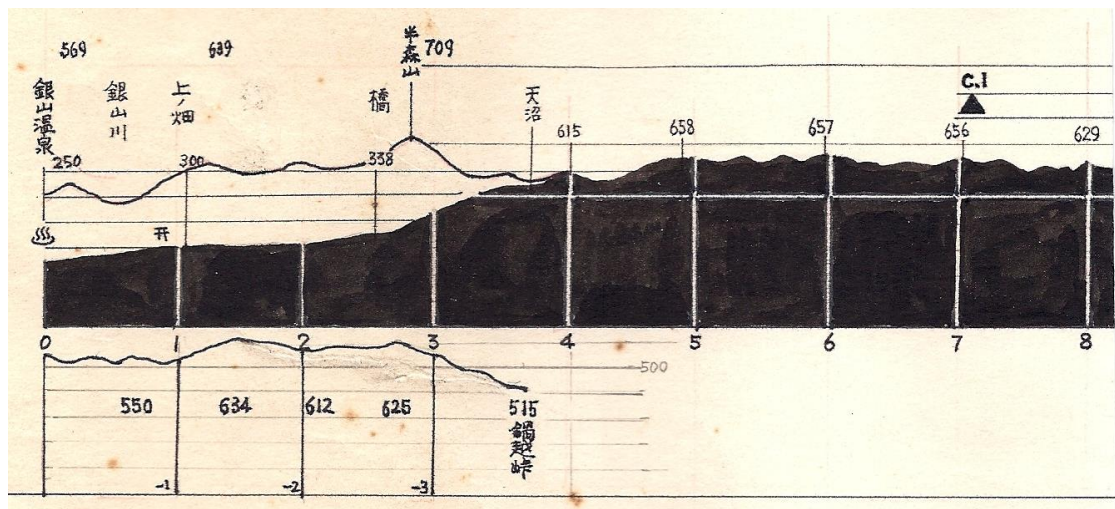
昭和四九年 四月五日～七日
今出隆康

三月二四・二五両日、神崎・遠藤の送りサポートの下、豪雪禍の尾花沢・銀山温泉より入山。天沼山で激しい風雪となり進路を阻まれ同地点に雪洞を掘り停滞。翌日空港を思わせる広い平のある山まで進んだが視界が僅か数メートル、雪面に鼻をこすりつけないとラッセルさえ失う悪天のため、一旦雪洞に戻り待期してみたが遂に断念。貴重な偵察行となつた。

四月五日

七・四五発の山交バスで関山峠を越える。天童で下車。銀山温泉行のバスに飛び移る。雪また雪の街と野を疾駆して一一〇〇バスは湯煙りの銀山温泉に到着する。ひっそりした旅館の家並みを通り抜け街はずれでワッパを装着する。温泉神社は雪の中に半ば現れており安全祈願の後、時計を見れば一一・二五、縦走の第一歩を踏み出す。天は暗く何やら霰か霧か、頬に降りかかる。前回の偵察のお蔭で迷うことなく雪路を辿る。田や畑に古いラッセルが何条か交錯し上ノ畑へと導く。積雪は一・五メートル位あろうか。僅かな平地は銀山川に分断され小さな橋上には馬櫓の轍が一筋、何やら懐かし気に眺められる。もう閉ざされた冬を破って人畜の息吹きが脈打ちはじめていた。雲底は低く垂れ込め標高三〇〇～四〇〇メートル付近にあり、かなり風も強く山鳴りしている。沢を渡る雪庇状の下で昼食休憩とし雨宿りしながら二〇分間とどまる。

一二・三〇出発。遙か前方の杉林帯の中に紫煙が棚引き驚きの目を凝らす。さては炭焼

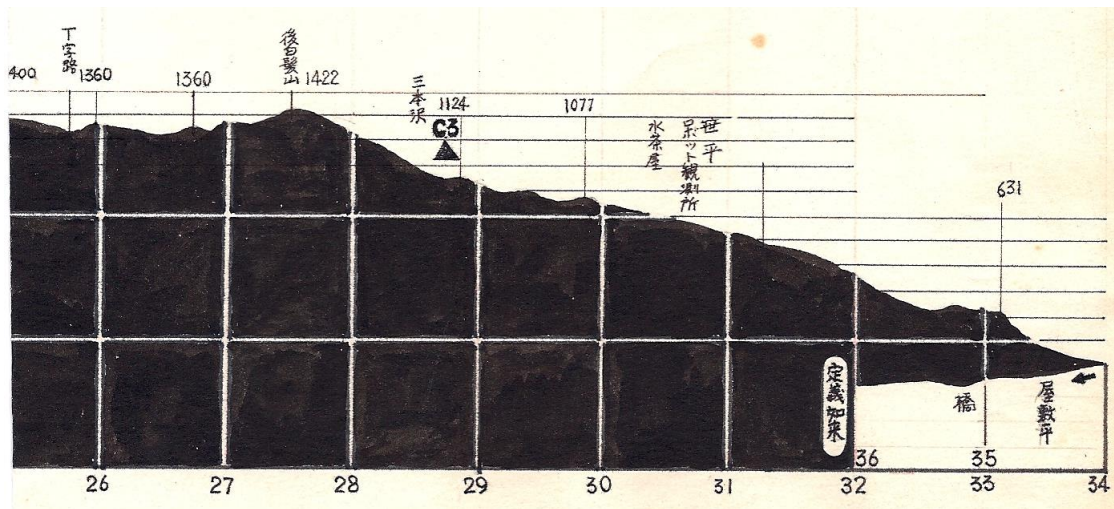


きさんが居るのかと思ひ人恋しくなるには早過ぎるなれど見当をつけて杉林に突入する。驚きはもう一度、山男が十数名杉の下枝払いの作業中であつた。刈払った杉枝をうず高く積み上げて盛大な焚火で雪面をへこませていた。頭目と覚しき男と十分間ばかり立ち話をしてから船形山を越えると言つた変な男を、それでも大ぜいで見送ってくれたのだつた。

傾斜は強まり杉林帯から唐松の疎林帯となつたが既に雲底に達し高みへ高みへと歩を運ぶのみであつた。半時間で六一五メートル、数本の桧が寄添つて立つ天沼山に着いた。強風と視界三〇メートルのガスが支配する寒い世界があつた。暫時の休憩の後、前回に掘つた雪洞を尋ねてみた。雪洞の前壁は崩れて天井から大きな垂氷が沢山並んでもう使用には堪えられない状態であつた。十日余りだったが低山のこととて変化は顕著であつた。焚火以来、カッターシャツを脱いで我慢していたが寒くてここで着る。

一登りして空港山の端に立つ。これより雪原の横断である。コンパスを睨みつつ針路を保つて前進。杣断完了、降り口付近でガスの切れ間を願つて停滞する。ヤッケ、手袋を着用し腰をおろしてガスの動きを観察する。

一四二〇、僅かに尾根の続きが確認されて勇躍歩さ出す。三〇分、やや腐れ状の雪をラッセルして六五七Pと覚しき頂上に出る。この六五七Pより尾根のワタリがある。やや鞍部状より右手に尾根をはずすのだが視界は二〇メートルそこそこの濃密さでこの付近大いに悩まされる。この先、雪洞までの一五〇〇メートルの通過に一時間四〇分を費し降つては迷ひ沢に達し再び戻り直し逡巡するといった苦戦が続く。六五六Pもまたのつべりした頂上でガスの中ではとらえどころがなく地図磁石もままにならず疲労を増すばかりである。雪はザクザクに腐つて登り返すラッセルは水っぽく重い。メモ帳より拾うと「一五・一五ワタリ岳に着く。再び濃霧。一六・一〇迷つた揚句ワタリ岳に登り直す。一六・一〇小ピーク。一六・三〇対岸に登る。雪洞作業開始、晴れてきた」とある。地形はこの付近複雑で県境主脈はそれに直角に横たわる幾つもの山々を細い尾根で串刺しにした工



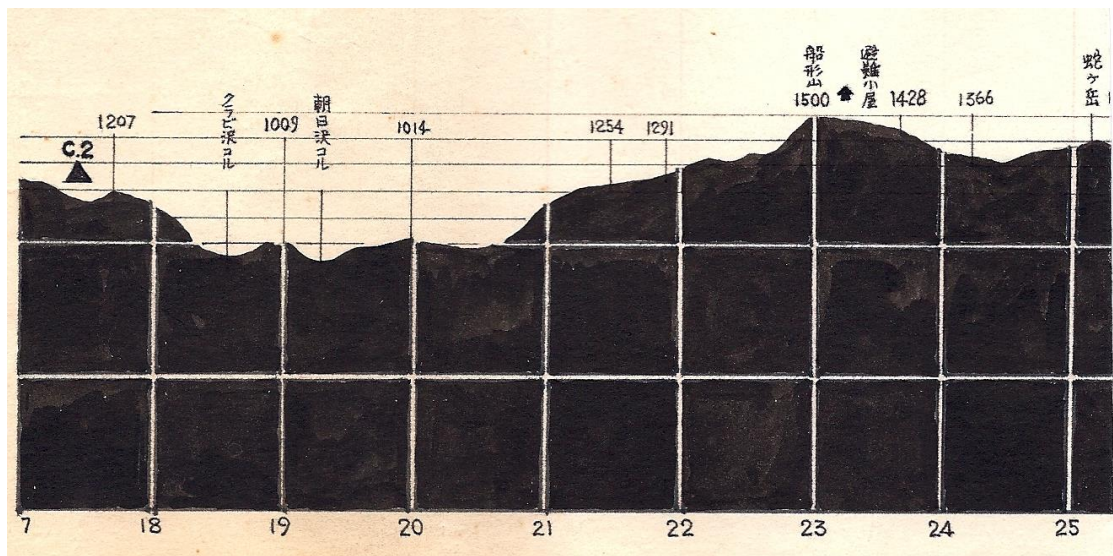
合で次のピークは対岸といった感じで受取れる。約二時間、堅雪の雪庇を鑿削して一夜の城を構築した。ラジオによると仙台市内は瞬間風速一八メートルに達したと報じていた。天気予報は明日晴れ、午後は曇ること。雪洞に落着いてからはガスはどんどん晴れて満月の世界を現出してきた。孤独の夜はまた格別、僅かの梅酒にしばし酔い歌い月を賞で大自然の胎内に宿るわがちっばけな生命、体を想うのであった。

「早雲の乱るる空に満月の美しとみる雪洞の窓」

六日

三時起床は予定通りであった。赤飯による朝食、パッキング。そして置土産。五・四五ワッパの爪を効かせて勇躍雪洞を飛び出す。寒い、そして雪はガッチリ締め小気味よい。今日はやるぞと気魄が全身に満ち溢れる。快晴となると気温が上り間もなく雪も腐る。そのため、シマリ雪のうちに何キロメートル稼げるかで今日の勝負が決まる。どんどん明るくなる空と山々の雪姿、昨日と変わる今日の大自然の大らかさはどうだろう。昨日はまるきり牛乳壺の中に閉じ込められてしまったようなものだった。魔法は霧散したのだ。六・〇五高倉尾根のハズシ地点通過。北日長山のトンガリが目の前だ。六・二八四〇メートル程下って八〇メートル標高を上げニッ瘤の小峯を越え北日長山のコルを通過。一五〇メートルの登りらしい登りが待っていた。「伝説の如く思えし日長山齡四〇にして今越えむとす」二〇分余りの喘登の砌り脳裡にむかむかする色んな言葉が間もなくすっきりと整列し一つの稚劣な歌を構成していた。

六・五〇、七八六メートル。小峯ながら荒神以北の秀峯北日長山は我が足許にあった。それは全く素晴らしい展望峯であった。来し方、空港山、半森山、吹越山、翁峠など手にとるように眺められ思わずカメラを取出す。わがトレースが県境をたどって残っている筈だが山脈が迂曲曲折のため指でたどるのも苦心するような山濤の繋りである。南望の山、



大入沢の深谷を隔てて兄貴分の南日長山の頂稜が厚い雪壁を纏って三ツの尾根を谷に落し凄まじい。雪壁には多数の黒い亀裂を這わせまた、雪庇の崩壊もしきりと見え標高僅か八六八メートルの山とは思われない風景である。これも豪雪の当地ならばこそその景観であろうか。その頂稜の左肩には黒森（一、〇八二メートル）の入道頭が豪然と構え、更に左に荒神山の巨峯が前衛の鋭峯を従えて厳しい姿である。そのまた向うには船形の西部諸峯が玉座を並べて光り輝く。

我に返れば感激している間に二五分も休憩してしまった。北日長からは急な東面の下りで滑りながら降りる。向つていればすぐ対岸の南日長山だが、そこへ続く尾根は右へ左へとつづれ折れる廻り道で五峯五峠の經由で仲々到着し難い。七・四五 出発より二時間経過、途中は当地初の瘦尾根であり、雪庇崩れでヤブを捲いたりしながら三角点のある七一八P通過。八・〇〇コル通過。更に二五分後六九八P通過。次第にラッセルとなりペースやや落ちる。南日長山の東峯八四二地点への登りは深いラッセルとなり加うるに尾根への突上げ地点は三メートル高さの雪庇が被いかぶさり進路を阻んでいるのでザックをデポしスコップで雪庇を切り刻み階段工作を施した。尾根に乗り上げたら風があり雪はややしまり大へん助かる。

南日長山（八六八メートル）はこの八四二地点より西北即ち逆方向に数百メートル隔っており半島状をなして殆んど高度差もなく戻って進む程の意義も薄いので割愛する。数百米南東に進み黒森の登り口で一本立てる。一〇・二〇であった。黒森（二〇八二メートル）へは二五〇メートルの険しい登りがあった。高温となり雪は腐ってラッセルを余儀無くされていた。この頂上で昼食とした。また、視界一杯に拡がった荒神山の連続写真を何枚か撮影した。

三〇分余りの休憩の後、愈々荒神山の山体に吸込まれる感じで歩き出した。果して荒神山に登れるウィークポイントはあるのだろうか。雪壁は急峻でありこの高温下底雪崩の危

	雪洞食	行動食	補給食	雪洞食
24 (日)	玄米お粥	おにぎり	干草・ミカン 煮干・鮎	おじや 漬物・梅酒
25 (月)	玄米餅 ラーメン	手製パン ゴマバター 蕎麦	干草・煮干 リンゴ	玄米餅・梅酒 ラーメン
26 (火) 誕生日	玄米餅 ラーメン	パン ゴマバター 蕎麦	干草・煮干 クッキー・リンゴ	玄米餅・梅酒 ラーメン
27 (水)	玄米餅 ラーメン	パン ゴマバター 蕎麦	ビスケット クッキー・リンゴ	非常食 ビスケット
28 (木)	予備日			半食 カロリーメイト

険度が増しているのではないか、など本山行最大の山場に差ししかかって来つつあった。

一一・五五、九六五P通過、峻な尾根が続く。前荒神は余り雪つかず岩尾根に松や灌木のあるワッパ足には腕力が頼りの登りであった。ちょっとした岩窟も乗越した。一二・四五、前荒神山（一〇七〇メートル）頂上に出る。頂上にベンチの松が有りどうしても腰掛けたくなる。高さといい太さといい自然の傑作である。この山は小兵ながらピリリと辛く巖しいものがあつた。

前衛峰において然りならば荒神山はさぞやさぞと思われる。ここから見るその堅固な城砦はまた幾つかの岩場を覗かせ雪崩に磨かれた峻しい北面を巡らせ登れるルートは僅かな樹木で綴られた県境の尾根というには乏しい面の折れ目を迫るばかりであろう。一旦鞍部に降り一步一步キツクステップで高度を上げて高度差二〇〇メートルを一時間の慎重な行動の後一三・四五荒神様を祠つた例の岩場に出た。不動尊が祠られて多くの鉄製の鉾や燭台が雪の下にある筈である。この先は右手を偵察しルンゼ状の岩間の雪を四ツん這いになって突破、高度差七〇メートルで広い頂上にと出た。嬉しや目の前にさえぎる雪はなくなっていた。難関荒神山（一二七〇メートル）を登頂したのであつた。夏径のないこの頂上は里人の畏怖のためか、忌憚されて殆んど処女峯として残されている奇峯でもある。緊張が解けてこの広潤な山顛の陽光を、そして春風を浴びて更に南に輝く船形山の秀麗な白聖の山姿に目を細める。いつの間にか船形本山も近づいていた。行けるものなら船形までも今日は足をのばしたいものだ。しかしこの荒神山までは八時間二〇分も費してしまっている。この先六キロメートル余りの行程をうまく乗切れれば頂上小屋へ着けるのだ。日没まで行動出来る時間は四時間である。雪洞を掘るか山頂小屋をとるかは即時に後者に決定した。

荒神山東峯（一二〇七メートル）一四・三三通過、振り返れば雪庇が幾重にも同じ類型に整い逆光に映えて美しい造型美を見せていた。これより二五〇メートル近い急降下だ。

船形連峯 積雪期縦走計画表

- 期 日 / 昭和49年3月24～28日(5日間)
- 目 的 / 船形北部県境尾根縦走
- 型 式 / 単独行によるラッシュタクティクス雪洞
- 距 離 / 2万54回 水平測距 36km
- 迷 路 / 北日長山より鶴子ダム一市野々尾茶沢
荒神山より西尾根1058-御所山荘-ダム
- 編 成 / 今出隆康 (送りサポーター) 連藤・神崎

携 帯 品	ホエブス	ビッケル	赤 布 50
ツエルト	W.G. a52	ワッパ	時計アラーム
スコップ	メ タ	オーバー類	ラジオ
雪洞扉	ベニヤ板	ラテルネ	天気図用紙
エアマット	シユラフ類	革 下	メモ・ペン
合羽上下	カヨ・燃料	目 出 帽	コッヘル
ローソク	地図磁石	サングラス	箸・スポン
マ ッ チ	ボンチョ	千 り 紙	新聞紙

腐れ雪を蹴散らしながら獲物を狙う鷲のように下る。一五・一五、L字型の一〇〇九P通過。一五・三〇、その南の小ピークにて二〇分休憩。天気快晴、西の風一〇メートルであった。

一〇〇九Pより二キロメートル余り、一二五四Pの鼻付近でザックからボンチョを取出して独り大袈裟にダウンしてみた。日暮れも近いのに全くだらしなく二〇分横臥してしまふ。あの快晴の空もそろそろ巻雲がみられそれがかえって空の青さを強調しているようである。しかし素晴らしい一日であった。

一七・三〇、一二九一Pを通過する。日も傾きを増し気温も急降し雪もやや締って来たようだ。

一七・五五、前ピーク大雪田を通過。これより約二〇〇メートルの急登である。強風に追い上げられつつ、ひたすら頂上を目指す。

一八・二五、船形山山頂に着く。既に日没となり代って満月で明るくなりつつあった。感激の頂上に立つても周囲の山々は月明の薄闇に沈み徒らに偏西風が汗を冷すのみであった。小屋は東側半分尾根のトタン板がはがされて吹溜り雪が片隅にうず高い。勿論無人、ガランとして淋しい。長駆一五キロメートル余りを一三時間四〇分稼ぎ続けた肢はシユラフの中で長々と伸ばされ休憩の時が来た。

七日

腕時計のアラームで目覚める。三時半の起床である。食糧箱の重量はさほど減らぬうちに最後の日を迎えた。今日の天気は下り坂のようなので一直線に定義に下るばかりである。夜来の風もやや風いで空に曙光が満ちてくる。曇天ながら視界は遠く船形連峯がずらりと展望できる。小屋の登山者利用記録に記事を書いてから朝茶をたてて名残り惜しい山小屋の一ときを過ごす。



船形山 葉師森

六・三〇、全オーバー、ワカン装備で出発する。今日のルートは何十回か通った懐しい尾根ルートであるから気が楽である。一時間後蛇ヶ岳を通過し三叉路着。三ッ峰、後白髪分岐の三叉路の標識が雪上に現われていた。南風による黒い雲が怒涛の如く押寄せて下界を蔭蔽し泉、北泉ヶ岳を呑み尽さんとしていた。また西方の寒風、白髪、仙台カゴなど近間の諸峯も生きものの如く躍動し脈うつ雲海に没せんとし峯頭が島の如くに一種荘厳な雰囲気であった。山のあくまで不動に対し雲の動の顕るしく昂まりと鎮まり、そして続く沖は際限なきエネルギーの累積である。

既に船形本山も遠去かり茲、後白髪の頂きに立てば本山行も終りに近く短かくも長き船形縦走の感慨の湧くがままにしばし時を忘れる。八・一五、最後の頂上を辞して下山にかかる。二万五千図には夏経が明らかに誤って記載されている。その誤った点線上を下る試みである。上空沢の右岸の急斜を一挙に下り、一一二四Pにて一本立てる。なる程今まで見たことのない風景が展開する。ブナの原生林が続く尾根となるがこの尾根ルートは今まで通ったことのないところである。夏径は遙るか下方を捲いて上空沢の三つの支沢を次々に渡って左岸尾根に取付き後白髪主稜に出る筈だ。即ちこの図上の夏径登山路は冬径と言える。分水嶺らしく雪庇も立派であるが次第に原生林の樹勢に吞まれて視界は不明瞭となってくる。

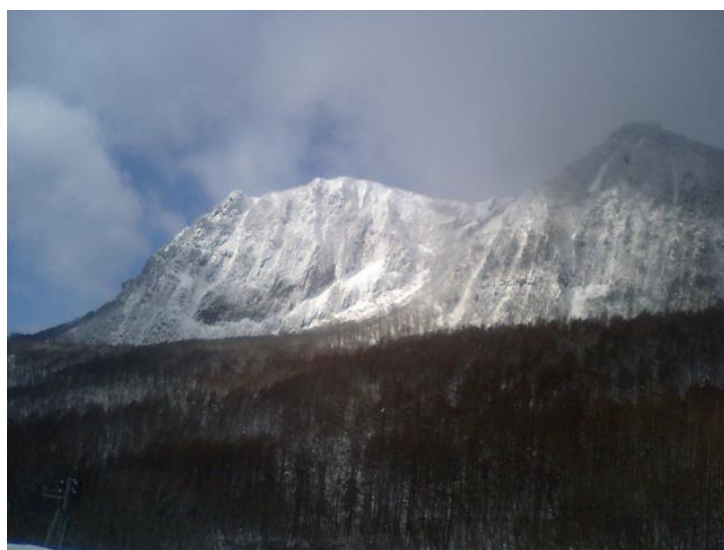
長尾根を一時間伝って後一〇・一〇昼食休憩とした。気温も高く無風状態であり、またこの深山の孤独ももう間もなく終ると思うと俗界に下るのがとても惜しい気持がする。ポンチョを拡げて足を投げ出し小一時間の豪勢な時間をつくった。一時瘦尾根を通過。十分分にして下空沢林道入口なる標識と面会した。これより夏径上に乗り、一一・五〇、定義清水を通過。

標高も低まり雪の腐れひどくなりワツパ重し。林道よりワツパを脱ぎ路傍の路の臺を摘み摘み定義に下る。屋敷平で定義如来の鐘の声を聞いた。更に二キロメートルの田舎道を



鐘の声に曳かれるように歩を運ぶ。定義如来は人々で混雑していた。いつの間にか大駐車
場、おみやげ屋食堂とけばけばしく俗化し聖地もはや幻滅の巻としか目に写らなかった。
山門通過は一三・三〇であった。

(やまびと二〇号掲載)



黒伏山南壁

船形・裏船形連峰縦走

平成一一年三月二十七日～三〇日

今出隆康（サポート…佐藤芳樹、引地三夫、幡野英夫）

楢岡―甕岳―長谷山―白森―柴倉山―楠峯―船形山―三ツ峯―水源―北泉―泉ヶ岳―スキー場

「産土の山を行く」深野稔生著の冒頭の記録に掲載された冬の船形山縦走の再現である。深野・神崎・宇野君の三名が昭和四九年三月に成功した五泊六日に至る同コースに一七年振りに単独で再挑戦となったわけである。ところが計画中にサポートしようと引地、幡野、佐藤（芳）の三君が名乗り出て初峰甕岳までと思っていたら引地君が一日、幡野君が二日、佐藤君が三日間のサポート申し入れがあった。なんとも珍しい形態となったものである。野球に一試合中ヒット、二塁打、三塁打、ホームランを打った人はサイクルヒット呼ばれ祝福されるとか・・・何かおかしい現象に戸惑いを感じたが、これも山岳会なればこそと有難く受けるべきと考えた。

さて、二七日、引地君の車で楢岡より入山。楢岡からは甕岳の山林に吸い込まれるように滑り込んで行く。杉植林帯をわけ入り積雪でストップ。霧雨が降り続きその中で服装。パッキングなど準備に忙しい。彼岸も過ぎて里には春の兆しが一杯漂っている。八・三〇夏径の切通しに従って尾根を目指す、行く程に雪道は怪しくなり夏径不明となり九・二〇一本立てて偵察する。夏径は沢沿いコース、馬立沼の周辺を通過する。ヒットの引地君、二塁打の幡野君が先行して三塁打の佐藤君、今出と続いて植林帯を登って行く。積雪は一メートル。一〇・一五、稜線に到達し七四八メートル。「山頂広場まで一二〇〇m」の標識に到着した。ここより北に折れ曲がって約一時間、甕岳山頂に着く。一、〇一五メートル

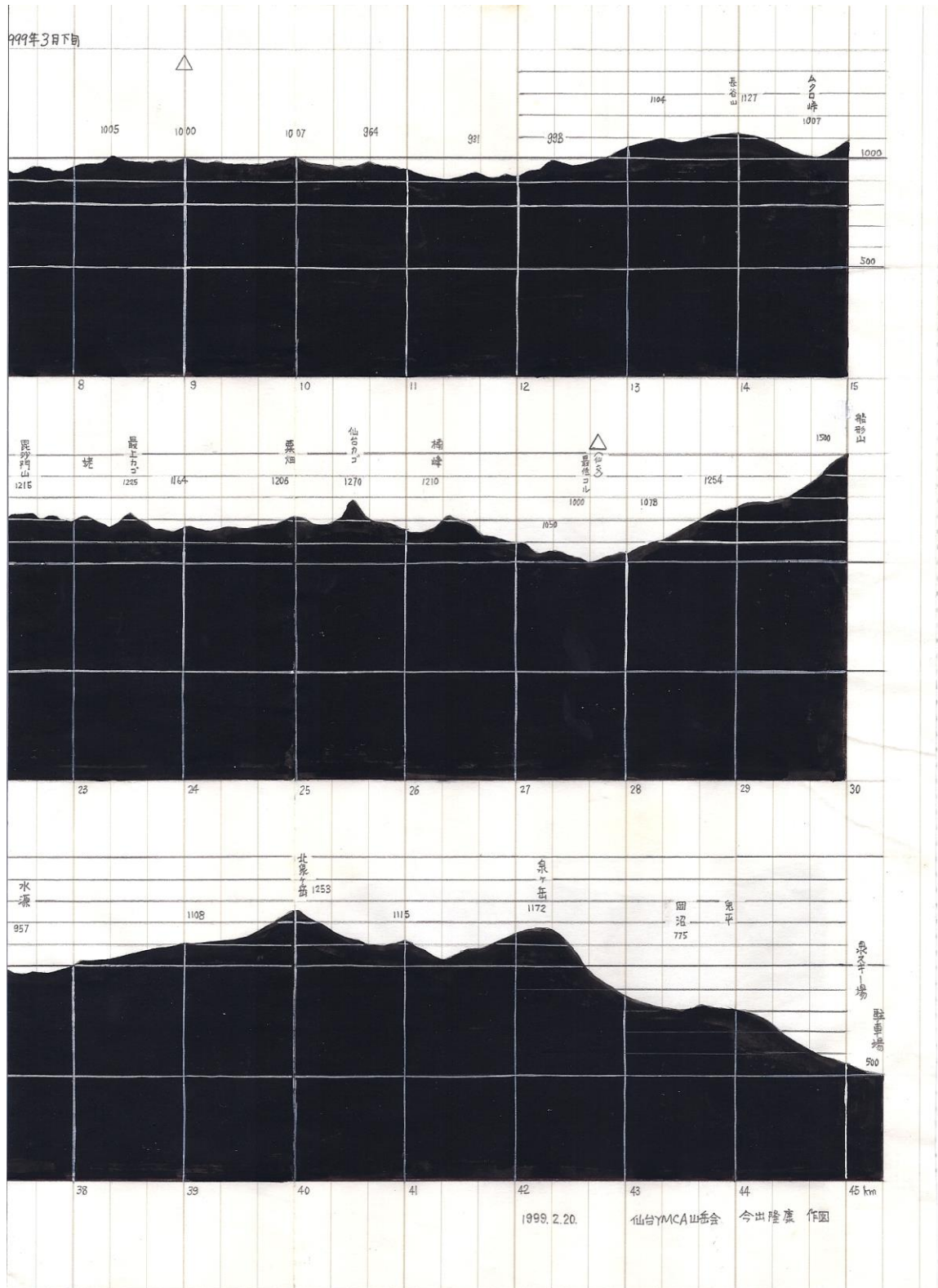


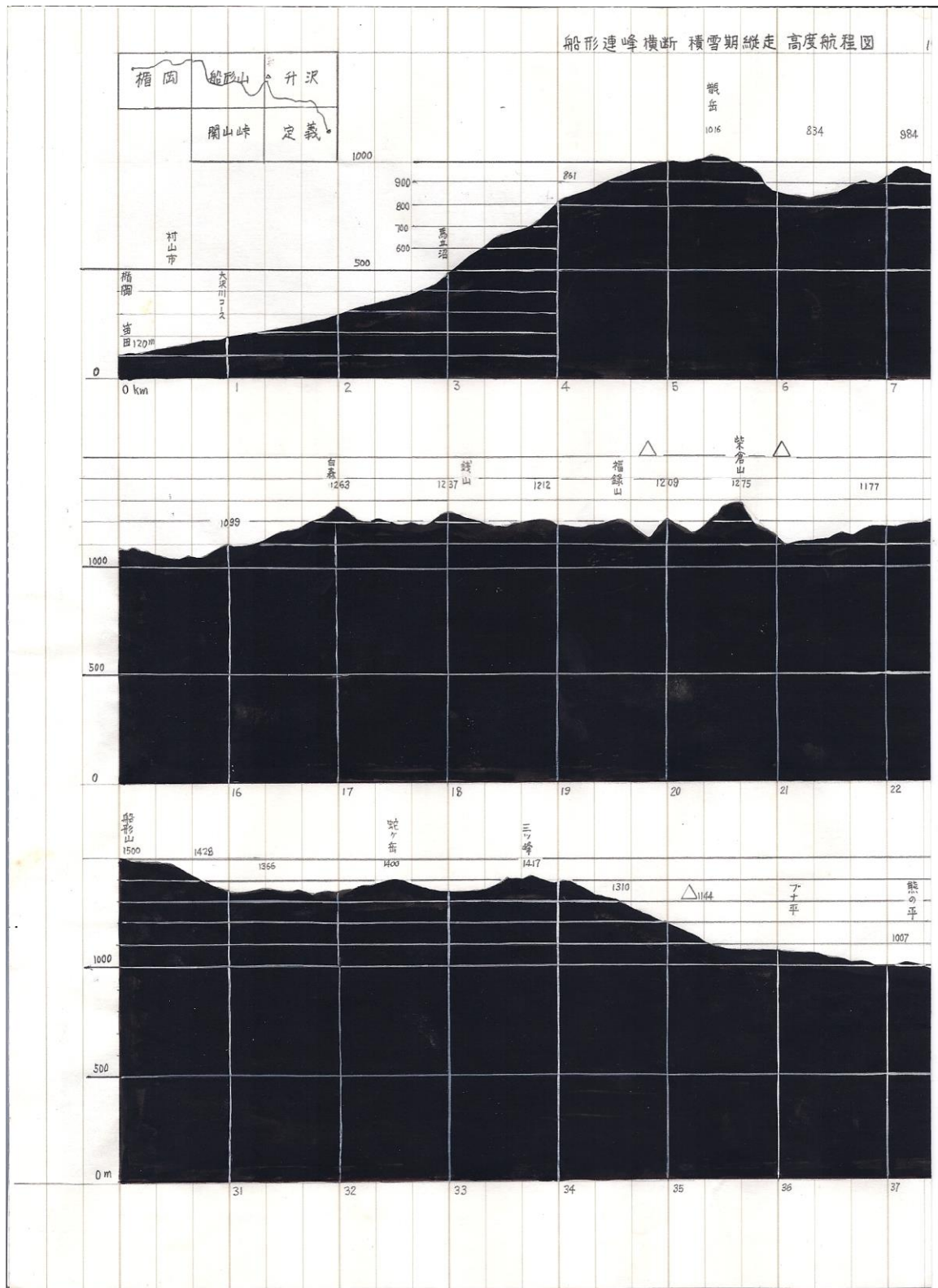
サポートメンバーと筆者（左端）

の頂上は小枝が水滴のまま凍結している寒い所であった。コシキとは何なのか？辞書を覗くと「米などを蒸す道具、すなわちセイロウ＝蒸籠＝RiceBoiler」とある。お釜に乗っかる炊事道具だ、お釜の上だから蔵王より格が上である。・・・ウームとは言い難いが雪雲に覆われた頂上で凍りかけた赤飯おにぎりを噛みしめて前途に備える。ここで、サポート隊は下山となる。残念乍ら下山の際の車両困難などで二墨打の幡野君はワンベースとなりヒットの引地君と一緒に下山となり野球史上稀なるサイクルヒット（違うってば）はギネス掲載不可能だった。一七年前は私もサポート役で深野氏のザックを頂上まで担ぎ上げらせて貰ったものだった・・・あの帰途拾った松瘤は今も記念品として大事に保存している。サポート隊ご苦労様ここからは夏径のない冬ならではの山涛の縦走となるのである。二〇〇メートルの降下は雪底充分であるが雪はザクザクとぬかる。八三四メートルのコルからジャスト一五〇メートルのクライムで一息つくくと九八四メートルPの展望台である。一二・三五なり。

この附近アリノトワタリ難所が連続する。雪は締まれどワッパはぬかり風雪模様が続く。登山口より八キロメートル歩いて一〇〇〇Pに到達し一息、熱いお茶がうまい。一〇〇メートルを上下する低山なれど尾根は全体に両側削ぎ落ちて油断を許さぬ瘦尾根地帯である。

一四・四五、ナギの難所キレット現れ雪も切れて捲きと藪漕ぎなどで難儀する。一五・四〇、一本立てて芳樹君地図を読み行く手を考察中。粉雪舞えど視界はよろしい。更に小一時間を前進し、一六・三〇テント設営。暴風塙も建設して安全を確保する。長谷山一二七メートル附近であった。ここまで登山口から一三キロメートルをトレースした。サポート隊のお陰で随分奥まで縦走が涉りとても満足な夜であった。本ルートは船形本山まで二九キロメートル、本山から泉ヶ岳、そして泉スキー場まで約一六キロメートルの尾根歩きであり、途中夏径の無い十余キロメートルがあるので積雪期のみ可能な縦走であろう。

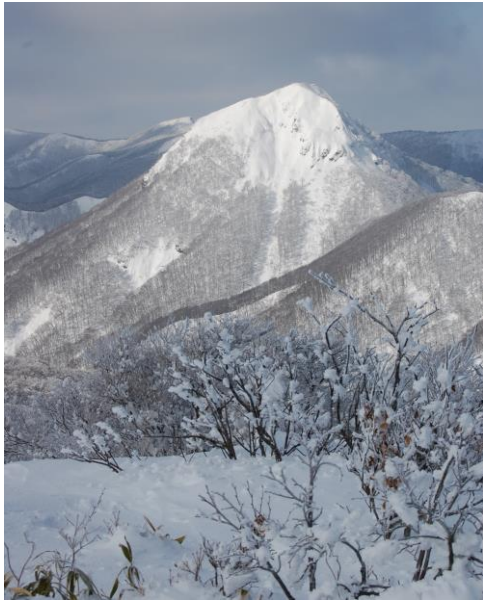






三月二十八日 六・四五出発。船形本山がくつきりと白い巨体を聳えさせている。いい天気。春山の醍醐味はカリッと締まった朝の歩行だ。歩行は軽やかに気分は爽快に周囲の山々を眺めながら能率の良い山行が出来る。七・一〇長谷山を下っていくとムクロ峠に着くムクロとは軀。体、なきながら、朽木の幹などの意味がある。その中のどの意味なのか。路形も感じられ、小屋らしきもの、杭が三本、一〇坪程の砂礫地もある。ムクロ峠から登りにかかると沢渡黒伏が峻しい表情で次第に接近してくる。八・二五白森頂上で大休憩。月山なども見えて展望を欲しいままにする。眼下に黒伏のスキー場が俯瞰され蟻のようなスキーヤーが蠢いている。白森（一二六三メートル）からは銭山（一二三七メートル）福緑山（一二三〇メートル）程良い配置で周遊し今山行最大の難関柴倉山（一二七六メートル）が兇型の威容で我々の前に立ち塞がってきた。その手前のコルで一本立てて柴倉攻略の相談をする。柴倉東面は日が直射し気温も高いので底雪崩の危険も大なのとザイルが無いことから安全策で行こうとなり、山頂を敬遠して北面を捲く事に決定、約一時間を要して、一〇・五〇トラヴァースを完了した。柴倉東面は雪崩のデブリ凄まじく雪崩の通り道は氷化して堅くピッケルでステップカットも二、三ヶ所あった。やはり柴倉山は険岨な山。次の機会があれば長めのザイル一本持参して頂上を乗り越えたいものだ。最上カゴの手前で昼食タイム。小雪がちらつき始め一二・一〇出発。最上カゴを難なく乗越し仙台カゴの尖峰を見ながら一二〇六メートルの栗畑の雪原に着いた。一三・〇〇栗畑を発ち仙台カゴの裾をトラヴァースしながら楠峰を登る。楠峰（一二一〇メートル）は尾根通しに登降し標高一、〇〇〇メートルの仙交のコルにC2を設営。芳樹君と共にする二泊目となった。天候が心配であったが下山する芳樹君の帰りのトレースが消えない事を念じていた。

三月二十九日天幕撤収。芳樹君のサポートを受けて一時間、船形山へと登攀する。七・一〇、樹林限界は近づいて芳樹君のサポートの任務は完了し握手して下山して行った。全区



柴倉山の鋭峰

間のほぼ三分の二の長距離を同行してもらい天候とラッセルが無ければ三日間で走破も可能と思われ程の勢いであった。高度高まるに従って強風とガスが濃くなりよろめきつつ頂上を目指す。立派なシユカブラが岩塊に成長し山頂標も美しい氷柱になっていた。

七・三〇、頂上を踏んで最高点に柏手を打ち即蛇ヶ岳へと蹠を返した。しかし主稜線はホワイトアウトとなり、広大な尾根をたどるのに難儀した。時折ガスが切れて僅か前方見えるとその都度地図と磁石でそろりそろりと前進し坦々としたシユカブラ地帯を南下した。蛇ヶ岳を下って三叉路、尾根分岐で空身となり、針路偵察。一一・〇〇、針路定まり三ツ峰へ登る。三ツ峰頂上一一・五五であった。地図・磁石ばかり見ながらの行程はえらく時間を費やす。C2から三ツ峰まで五キロメートルに六時間を消費していた。それでも顕著な尾根だからこれは判る。しかしこの先は掴みどころのないブナの大原生林に入るのだ。晴れていたって迷走地形、この風雪の中このブナ平に単独で侵入するのだからやはり恐ろしい。尾根通しに行けば迷い尾根に入るのは必定、磁石片手に針路東で樹林限界まで。その手前に二〇〇メートル程の吹き溜まりの雪田の緩斜面がある。尾根形状が消滅すると同時に深いラッセルが待っていた。莫々たる樹林の新雪を漕いで信じた方向へ踏み入る。ここから南東に変針するタイミングが難しい。この地点はクリームパンのグローブ型に東から南にかけて四方向に鈍重な尾根がある。まあもともと読図力は良い方ではないし偏差経線も地図に書き込んでいない。そんな繊細な神経も持ち合わせていない古い男だから大雑把にアバウトな感覚で山にいるのだ。

一二・五〇、風雪に続き周辺は太木しか見えない。このまま下っていいものか。ここぞと思う方向を進んできたが尾根は東に続くのに右手に沢状地帯が平行するようになってきた。沢はそのまま北へ向かいつつある。ザックをおろして地図・磁石、警戒していたのにまんまと迷い尾根に陥ってしまった。やっぱり失敗、必ずそうなると覚悟していた通りだ。正しい針路をとるために間違ってみるのも確実な方法である。ラッセルを辿って登り



返し三〇分、ザックデポしては偵察。沢状を横断したりブナ平を荒らし廻ったが視界悪く天気も悪化の一途なので無駄な行動は諦め設営にとりかかった。一四・一〇、早々に大樹の防風楯に守られるC3を建てる。夕食と天気図と睡眠が疲れた身を癒してくれる。

三月三〇日 六・三五、C3撤収出発、嬉しや北泉の姿がかすか見えた。登り返して南の尾根に移動。小雪、時々強風。七・四〇ブナ平と真ん中、北泉見えず。八・一〇、失敗に鑑み大胆に南に修正したらまた間違え第三尾根に入ってしまった。遥か下方に林道らしきもの発見、ラッセルは四〇センチある。第二尾根（本尾根）に乗り上げ下がって行くと九・〇〇、熊の平の標識を発見する。迷いの呪縛はこれまでで気分もさっぱりと縦走を続けられた。

九・二七、水源に到着。積雪一・二メートルで標識がやっと雪面に出ていた。ここに至って太陽が出てきてサングラスをかける。ブナの幹に赤丸なども時々見られてきた泉ヶ岳の西面を捲いて行くとやがて桑沼分岐着。一〇・一七、天気は快復し暑く薄着になり休憩とした。

一一・一五、北泉ヶ岳頂上に着くと男性の単独登山者がいたので色々話をする。その人は皆川一輝さんと言ひ泉スキー場に駐車しているとのこと。仙台まで同乗させて下さることと一緒に下山となった。彼は水神経由で自分のラッセルを辿り私は三叉路から泉ヶ岳へ向かった。雪もブナ平の三分の一となり両者の隔たりに驚く。泉ヶ岳は一二・一五。静かな山頂で仙台平野を眺めてから下りはカモシカコースを駆け下った。一三・一五、駐車場に着き靴を洗い装備を解除しアスファルトの上に並べて乾かしていたら皆川さんも北泉から下りてきた。登山装甲車と言った感じのハイエースはすべて登山の為に艤装されていて驚愕した。すぐにコーヒーが沸いて三泊四日間のフィナーレを飾ってくれた。



船形山本峰と仙台カゴ



仙台カゴを眺めながら進む

甕岳から船形縦走はなかなか魅力的な冬コースで一七年間も放置してやっと再発見と
なったが途中の雄峰、岩峰など擁し多彩なプログラムが組めるように想う。

(やまびと季報二二号掲載)

船形・裏船形連峰縦走

